

# 史 跡 斎 宮 跡

昭和58年度現状変更緊急発掘調査報告

昭和59年3月

明 和 町  
三重県斎宮跡調査事務所

## 序

斎宮跡は、古くから明和町斎宮にあったことは明らかでしたが、その具体的な位置、規模といったことは全く不明でいわゆる『幻の斎宮跡』と呼ばれてまいりました。

そのため、昭和48年から県教育委員会によって、範囲確認調査が行われ、東西2km、南北700mの約140haに亘る広大なものであることがほぼ判明し、昭和54年3月国史跡として指定されました。

本町としましても、国唯一の文化遺産として永く後世に伝え、広く文化の向上に活用していきたいと考えております。

近年、住宅密集地を取り込む遺跡の性格から、個人住宅造成等の現状変更申請が非常に多く、そのため町においては、国並びに県の助成を得て事前発掘調査事業を実施し、遺跡の究明をいたしているところであります。指定をうけて以来、5年が経過し、斎宮跡のペールが除々にあらわれてまいりましたが、さらに今後の調査により斎宮跡の姿がより明確になることを期待しております。

ここに昭和58年度の調査報告書をまとめあげることが出来ましたのも、県斎宮跡調査事務所並びに関係各位のご協力とご支援の賜と、深く敬意と感謝を申し上げる次第であります。

昭和59年3月

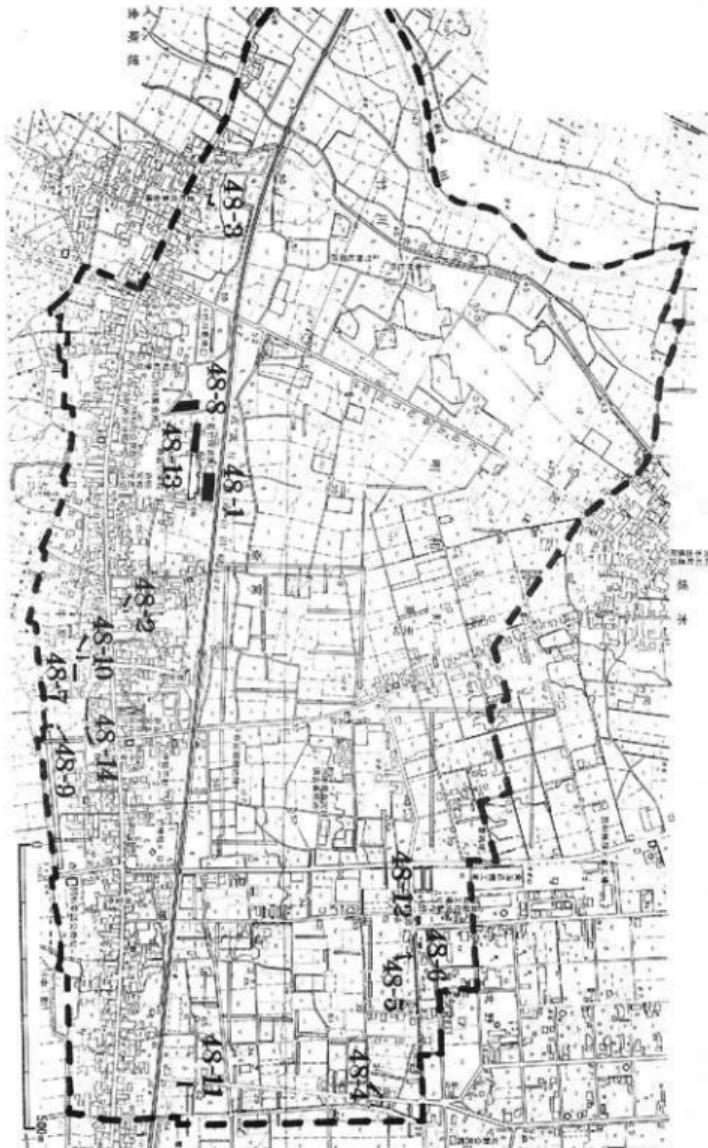
三重県多気郡明和町  
町長辻英輔

## 例　　言

1. 本書は明和町が昭和58年度国庫補助金の交付をうけて実施した史跡斎宮跡の現状変更緊急調査の結果をまとめたものである。
2. 調査は明和町が調査主体となり、三重県斎宮跡調査事務所が担当した。
3. 本書の中で第48-1・13次の2件の発掘調査は明和町教育委員会の調査であり、第48-5・9・10・14次とともに、調査費用は明和町が単独で負担した。  
なお、町和町教育委員会の調査については、別に報告書を刊行の予定である。
4. 明和町教育委員会による第48-1・13次の現地調査は町教育委員会中野敦夫技師が担当した。
5. 発掘調査・整理および本書の製作には斎宮跡調査事務所の山沢義貴、谷本銳次、福村直人、倉田直純があたり、森本敦子、刀根やよい、皇学館大学生坂真弓美、豊田敏子の協力があった。
6. 造構実測図、造構表示等は全て三重県斎宮跡調査事務所刊行の調査概報に準じている。

## 目 次

1. 前 言.....	1
2. 第48-1次調査.....	2
3. 第48-2次調査.....	5
4. 第48-3次調査.....	6
5. 第48-4次調査.....	8
6. 第48-5次調査.....	10
7. 第48-6次調査.....	13
8. 第48-7次調査.....	15
9. 第48-8次調査.....	16
10. 第48-9次調査.....	20
11. 第48-10次調査.....	21
12. 第48-11次調査.....	22
13. 第48-12次調査.....	24
14. 第48-13次調査.....	25
15. 第48-14次調査.....	28



第1図 発掘調査個所位置図 (1 : 10000)

## 1. 前　　言

史跡飛鳥宮跡での個人住宅建設に伴う事前の発掘調査は、史跡指定以前の昭和50年に遡る。当時より遺跡の重要性を考え、町が補助金の交付をうけて事前の発掘調査を実施することになった。また、町道や公民館建設といった公共事業についても事前の調査を町単独事業として実施してきており、多大の成果をあげてきた。

たとえば、近鉄線より南側の住宅地区での調査で検出した井戸からは平安時代後半の綠釉陶器、灰釉陶器、土師器などの良好な一括土器を検出しておらず、また北方の坂本や西加座地区では「美濃」刻印土器や「水司鴨」ヘラ描土器などの発見があり、部分的な発掘であっても、考古学研究に欠くことのできない貴重な成果があった。

昭和58年度は保存管理計画の見直しの年でもあり、調査件数の増加が予想されたため、予算を昨年度に比べ倍額にして実施することになった。調査件数は10件、調査面積1,440m<sup>2</sup>に及んだ。この補助事業に伴う調査の他に、明和町の町道側溝や学校建設に伴う事前の調査も5件、2,317m<sup>2</sup>に亘って実施している。

調査箇所は宮城北東部及び近鉄線以南の地区が多い。宮城の東部では以前より確認している東を限る大溝を再確認している。またこれまでの調査結果より宮城の東側部分は平安時代前半頃の官衙部分であり、奈良時代の遺構は無いと考えていたが、第48-11次調査では奈良時代の掘立柱建物や円面鏡が出土しており、奈良時代の官衙の一部がこの地にまで及んでいる可能性が出てきた。一方、宮城の南部分では牛糞集落の中あるいは南側の畠地である。この地は旧参宮街道沿いであり、江戸時代以降の遺構が数多く重複している状況であるが、場所によっては第48-7次調査のように区画溝かと考えられる溝や、第48-2次調査の如く僅か27m<sup>2</sup>の狭い範囲での調査でありながら掘立柱建物が検出されたりしている。このように住宅密集地区においても豪華閑連の遺構、遺物が遺存していることが各所において確認された。

年　度	現　状　変　更 申　請　數	発　掘　調　査 件　数	調　査　面　積	補　助　金　事　業 調　査　件　数	補　助　金　事　業 調　査　面　積
54	33	17	3,968	12	996
55	60	12	1,281	10	815
56	53	12	5,416	10	696
57	50	8	657	7	577
58	52	16	3,757	10	1,440

## 2. 第48-1次(6 ACM-M)調査

調査場所 明和町斎宮字広頭3385

原 因 小学校プール新設

調査主体 明和町教育委員会

調査協力 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和58年6月1日～6月30日

調査面積 1,050m<sup>2</sup>

### 1) はじめに

斎宮小学校の裏手、近鉄線との間で、これまで若竹幼稚園のあった所である。この付近では、

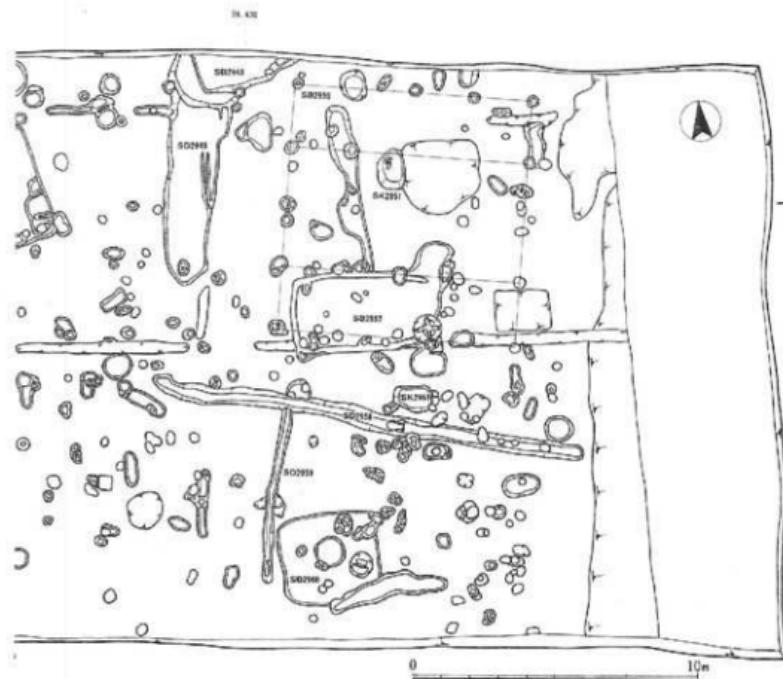


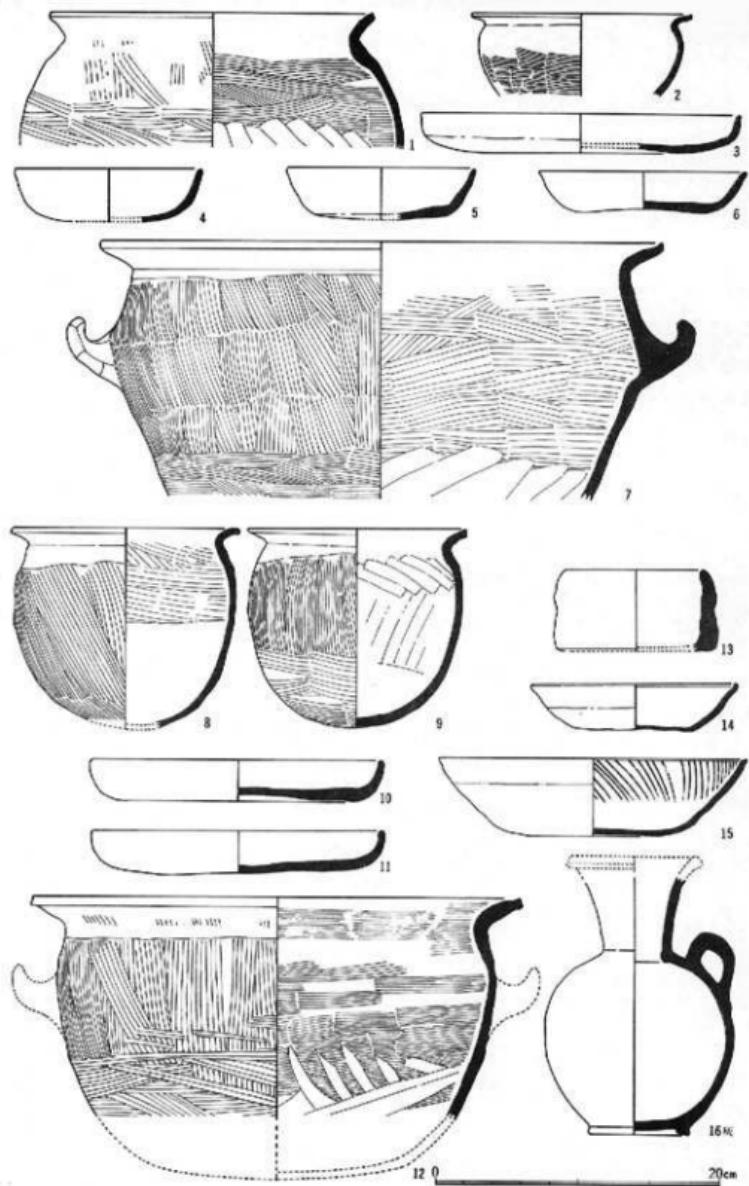
第2図 遺構実測図 (1:200)

昭和52年の第18次（学校建築）や昭和54年の第25次（個人住宅建築）の調査を実施しており、奈良時代および平安時代後半以降の遺構、遺物が出土している。中でも第18次の調査では築跡および四脚門が検出されている。

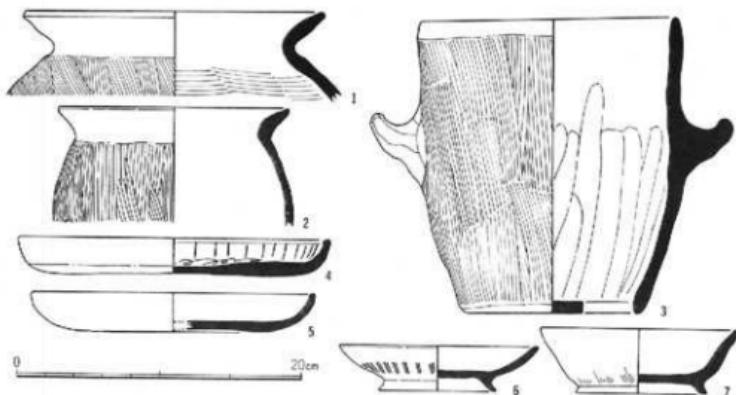
## 2) 調査概要

検出した遺構には奈良時代の竪穴住居7戸、掘立柱建物1棟、土塁、溝、平安時代の掘立柱建物1棟、土塁、溝などがある。竪穴住居は調査区全域から見つかっている。規模は最大のS B 2952は $4.7m \times 2.8m$ 、最小のS B 2943は $2.5m \times 2.5m$ である。S B 2943、S B 2947、S B 2952、S B 2957の4戸の東壁の一部にはカマドの痕跡と思われる焼土が見られた。掘立柱建物S B 2944は3間×2間の南北棟の建物で、建物方向は北に対し $12^\circ$ 西へ偏る。平安時代の掘立柱建物S B 2950は逆に東へ $10^\circ$ 偏る4間×2間の東西棟の建物で、南、北に廊をもっている。溝S D 2949、S D 2958はこの建物を画する溝かもしれない。





第3図 遺物実測図 (1 : 4) 1~7 ; SK2945, 8~12 ; SB2943, 13~16 ; SK2951



第4図 遺物実測図（1：4） 1～7；SB2947

奈良時代の堅穴住居からは多数の土師器が出土しており、中でもSB2947、SB2945は土師器壺、杯、皿、瓶、頃窓器、蓋、壺などが出でている。平安時代の遺物はいずれも後半の土器で各種の土師器、灰釉陶器をはじめ黒色土器、製塙土器がある。この他に椀、皿、段皿、鉢、香炉の蓋といった緑釉陶器片も出土している。

### 3) まとめ

堅穴住居が多数検出された様子は古里地区や塚山地区とよく似た傾向であり、宮城中央から東部の大型建物が集中する地区とは異っている。また、東部地区の中心となる平安時代前半の遺構、遺物が殆んど見られないこともこの地区的特徴をあらわしている。

## 3. 第48-2次(6ADP-Q)調査

調査場所 明和町斎宮字牛葉3033-1・2

原 因 個人住宅建設

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

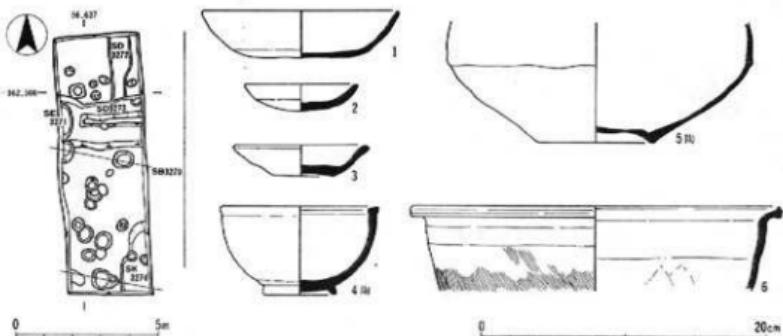
調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和58年5月23日～5月27日

調査面積 27m<sup>2</sup>

### 1) はじめに

近鉄斎宮駅の南東 160m の個所で、住宅密集地区内である。現状は植木が数本植っている畠



第5図 遺構(1:200)・遺物(1:4)実測図

で、標高は12.2mである。植木を移植したあと、申請建物の東側に幅3m、長さ9mの南北トレンチを設定した。

## 2) 調査概要

遺構の検出される地山面までは60cmと比較的深かったため、立木の抜取穴やゴミ穴等により表面がかなり擾乱されていたものの、遺構面への影響は少なかった。

検出した遺構には平安時代の井戸S E3271、掘立柱建物S B3270、T字に直交する鎌倉時代の溝S D3272、S D3273、室町時代以降の土塙S K3274がある。掘立柱建物S B3270は梁行2間、桁行3間以上の東西棟建物で、柱掘形は70cm前後である。建物の方向は東で南に11°ばかり偏る。柱掘形内から縁袖陶器、土師器片が出土している。溝S D3272、S D3273は深さ10cm～15cmの浅いもので、ほぼ方位にのっている。遺物は平安時代後半より鎌倉時代および室町時代の土器が出土しており、縁袖陶器も6点ある。

## 3) まとめ

小範囲の調査であったが、比較的遺構密度の濃い場所であることが確認され、近鉄線以南の住宅地区についても、でき得る限りの調査の必要性があらためて痛感された。

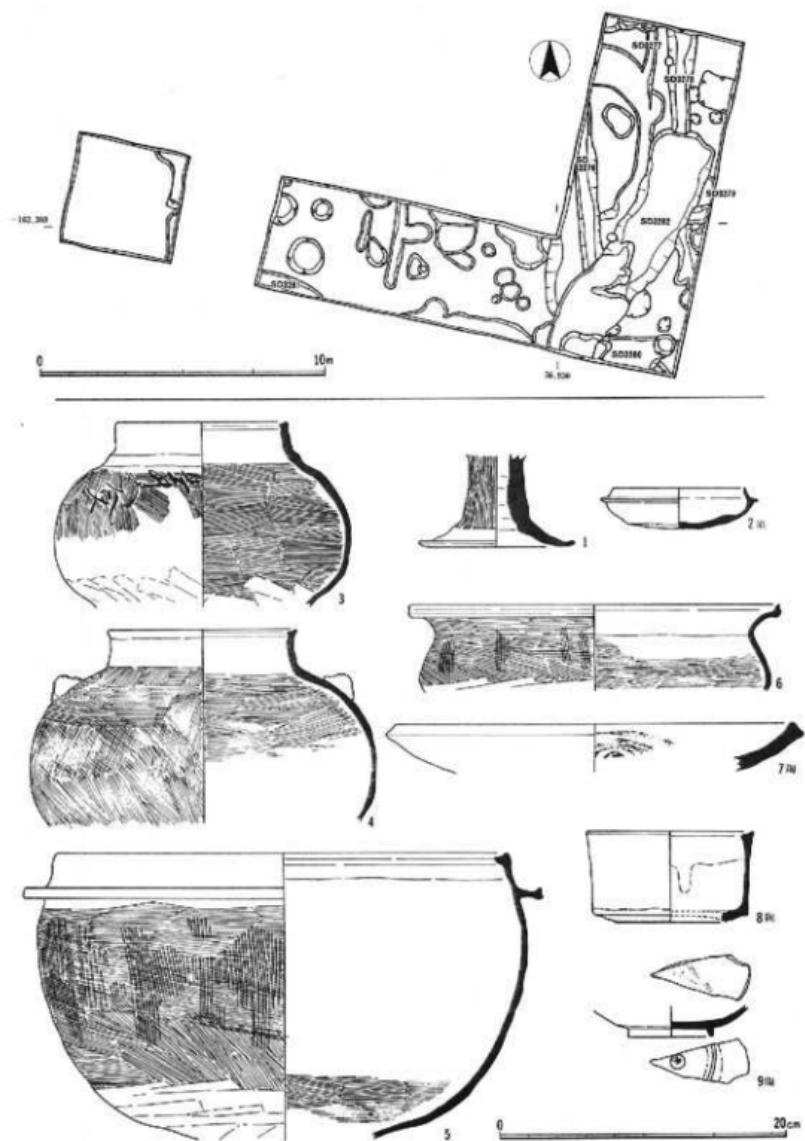
## 4. 第48-3次(6ABL-M)調査

調査場所 明和町竹川字中垣内461-4

原因 個人住宅建設

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所



第6図 遺構 (1:200)・遺物 (1:4) 実測図

調査期間 昭和58年5月25日～6月1日

調査面積 116m<sup>2</sup>

### 1) はじめに

史跡斎宮跡の西寄り部分の台地縁辺部で、近鉄線の南、參宮街道沿いの集落の裏手の畠地で、標高13.7mの個所である。これまで、この近くでは昭和52年に町道新設の際、第16次の調査を実施している。僅か幅1m、長さ65mに亘る調査であったが、多数の土塁、溝、柱穴が見つかりっている。東西に4m幅、南北に5mのL字形のトレンチを設定した。

### 2) 調査概要

調査区の西側は一部分、土取りされていたり、植木の根の痕があったが、東側部分には南北に走る多数の溝があった。この個所は表土が厚く、地山まで地表より50cmである。

検出した遺構は室町時代の6条の溝S D3276、S D3277、S D3278、S D3279、S D3280、S D3281と、弥生時代中期の溝S D3282のみで、明らかに斎宮寮にかかる時期の遺構は検出できなかった。

遺物はS D3282からは弥生時代中期の土器片が比較的多数出土している。一方、室町時代の溝からは鎌倉時代以降の土師器鍋、山茶碗、陶器片が、また、発掘区の西側部分の包含層からは江戸時代の陶器、土師器片が多く出土している。中には、土師器壺で「毫升五合入」と墨書きされたものがあり、古瀬戸の馬の目皿や香炉、染付で高台内側に刻印された椀などがある。

### 3) まとめ

これまで竹川の中垣内地区では、計画調査（第30次、第36次）を2ヶ所、町道新設に伴う事前調査を2ヶ所で行ってきた。その調査結果によれば、台地縁辺部は、弥生時代中期の住居をはじめ、飛鳥時代～奈良時代の遺構や鎌倉時代以降の遺構が多く検出される地区であることが確認されている。今回の調査地点もほぼ同様の状況を示すことが認められた。

## 5. 第48-4次(6AGL-B)調査

調査場所 明和町斎宮字東前沖2480

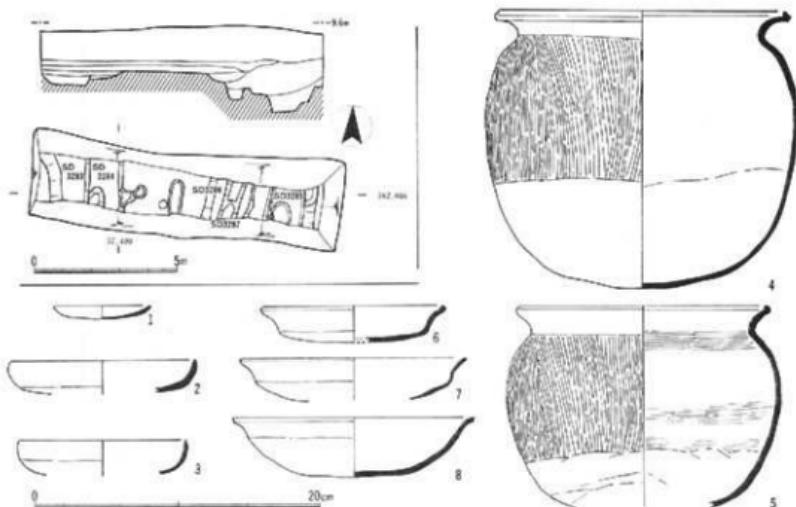
原 因 個人住宅建設

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和58年5月30日～6月3日

調査面積 33m<sup>2</sup>



第7図 遺構 (1:200)・遺物 (1:4) 実測図 1~3; SD3285, 4~8; SD3283

### 1)はじめに

史跡の北東隅部分で、東部分を南北に流れるエンマ川に沿って、東側と西側に大溝が走ることがこれまでのトレント調査によって確認している個所である。調査個所は標高8.3mの畠地であり、調査時には既に1.2m程盛土してあった。

### 2) 調査概要

平安時代中葉の溝SD3283、鎌倉時代の溝SD3285、SD3286、時期不明の溝SD3287を検出した。SD3283は幅2.6mで深さ約50cm、古い溝を切り込んでいる。埋土より黒鉢90号窯期の土師器皿、皿、甕が出土した。SD3285は幅2.3mで、深さは旧地表より1.7mである。埋土は青灰色粘質土で、土師器皿、甕、山茶椀片が出土している。

### 3)まとめ

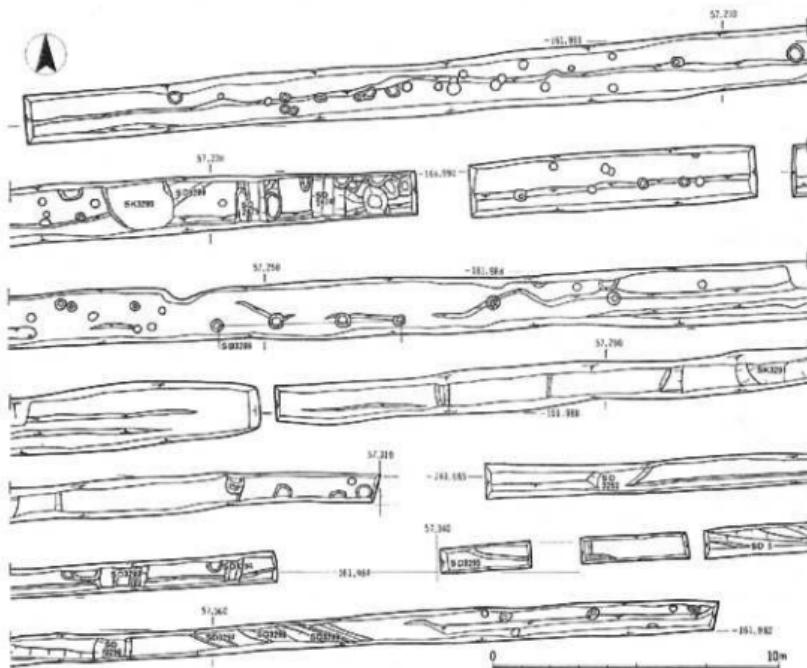
調査地点の北約10mの個所で昭和52年度に実施した第14-2次調査では斎宮跡の東の限りとされる溝が確認されており、今回の調査においてもこの溝が確認することができた。又、平安時代中葉の溝の確認は新たな発見であった。

#### 6. 第48—5次(6 AGD・6 AFE)調査

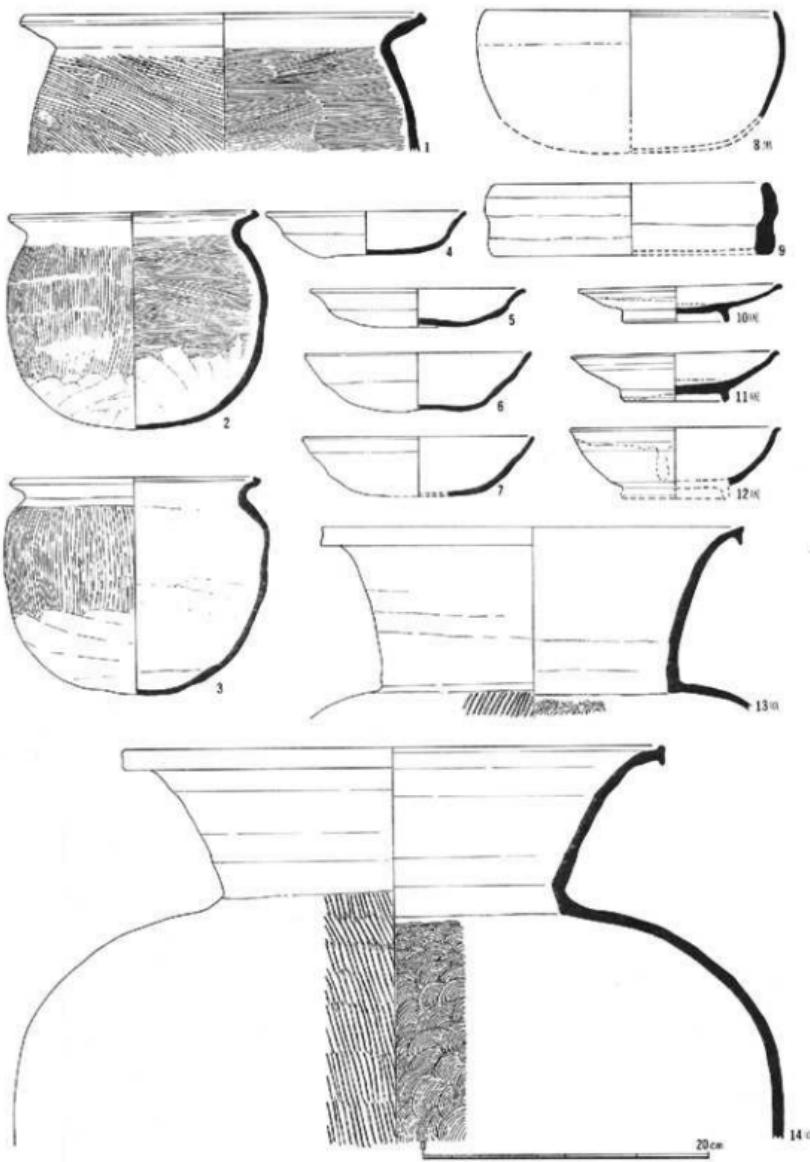
調査場所	明和町斎宮字東前沖
原 因	町道側溝新設
調査主体	明和町斎宮跡保存対策室
調査担当	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和58年 7月26日～8月31日
調査面積	260m <sup>2</sup>

## 1) はじめに

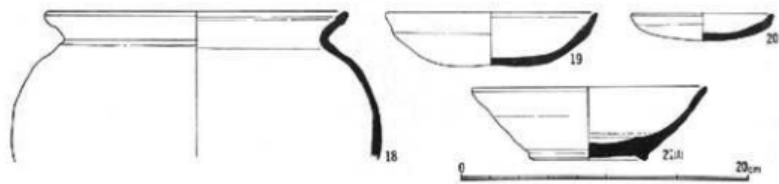
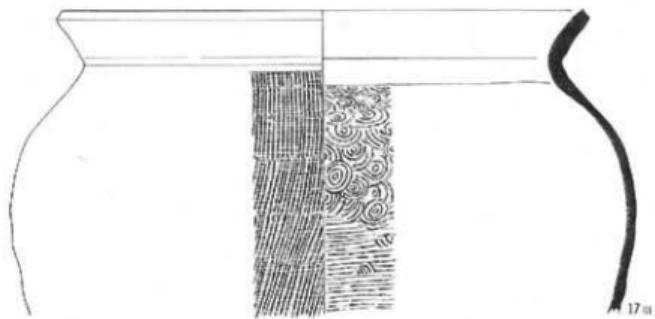
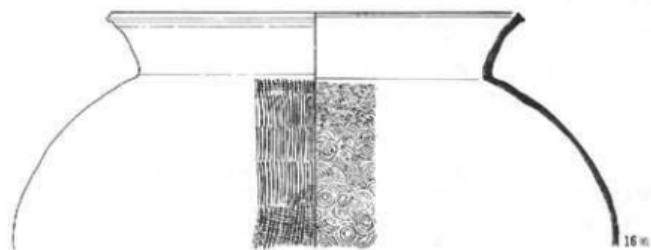
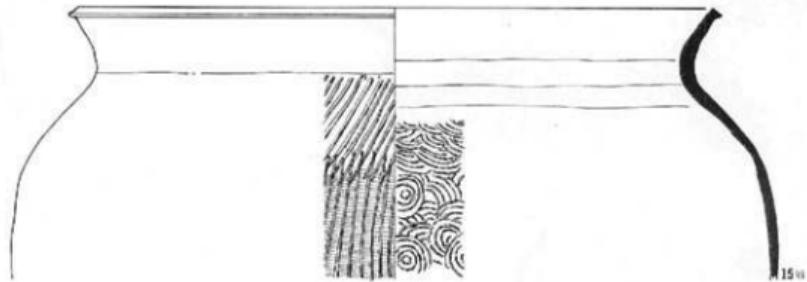
昨年度実施した町道側溝新設の際に実施した第43-6次調査に引きつづき今年度も側溝が新設されることになったために実施したものである。斎宮跡の北部分、町道斎王・北野・東野・相野線沿の南側に付設される側溝で標高9.0m~9.1mの個所である。今回の調査地点の東側部



第8図 遺構実測図(1:200)



第9図 遺物実測図 (1:4) 1~14; SK3290



第10図 遺物実測図 (1 : 4) 15~17; SK3290, 18~21; SK3291 (16・14のみ1 : 8)

分では斎宮跡の北を限る大溝S D 5が走ることが予想され、西側部分では昭和37年に「水司鴨口」のヘラ描き土器が出土した第37-4次の調査区の南側にあたる。

## 2) 調査概要

幅のせまいトレンチ調査であったが、平安時代の掘立柱建物、溝、土塙、鎌倉時代の溝などを検出した。中でもこれまで見つかっている古里地区よりつづき斎宮跡の北を限る大溝S D 5や、第37-4次で検出した平安時代後半のS D 2474や末葉のS D 2475の延長部分を確認している。S D 2474は幅1.2m、深さ45cm、S D 2475は幅1.5m、深さ10cmである。S D 2475からは山茶碗、山皿、土師器破片が出土している。S D 5は幅2mで中段からは幅80cmと細くなりほぼ垂直に掘り下げ、地山上面より2m以上深くなるS D 5独特の形状を呈している。灰釉陶器片や須恵器表、擂鉢の破片が出土している。

平安時代中葉の土塙S K3290は調査区西端より35m程の個所で、径2m、深さ60cmの円形の土塙で、多数の灰釉陶器、土師器、須恵器の破片が800片近く出土しており、黒菴90号窯期の良好な一括資料である。また掘立柱建物S B3288はS K3290よりさらに東へ30m程の個所で、桁行3間の東西棟の建物で、柱間は2m+2.3m+2mである。他にも柱穴と思われるビットが多数見つかっているが、調査区が狭いためまとまらない。

## 3) まとめ

掘立柱建物としてはあまりまとまらなかったが、平安時代中葉より末葉のビットが多数検出でき、第37-4次の調査結果と同様、当地区一帯はこの時期の建物が主体をなしていたものと考えられる。

# 7. 第48-6次(6AGC-A)調査

調査場所 明和町斎宮字西前沖3550-1

原 因 農業用倉庫の新築

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

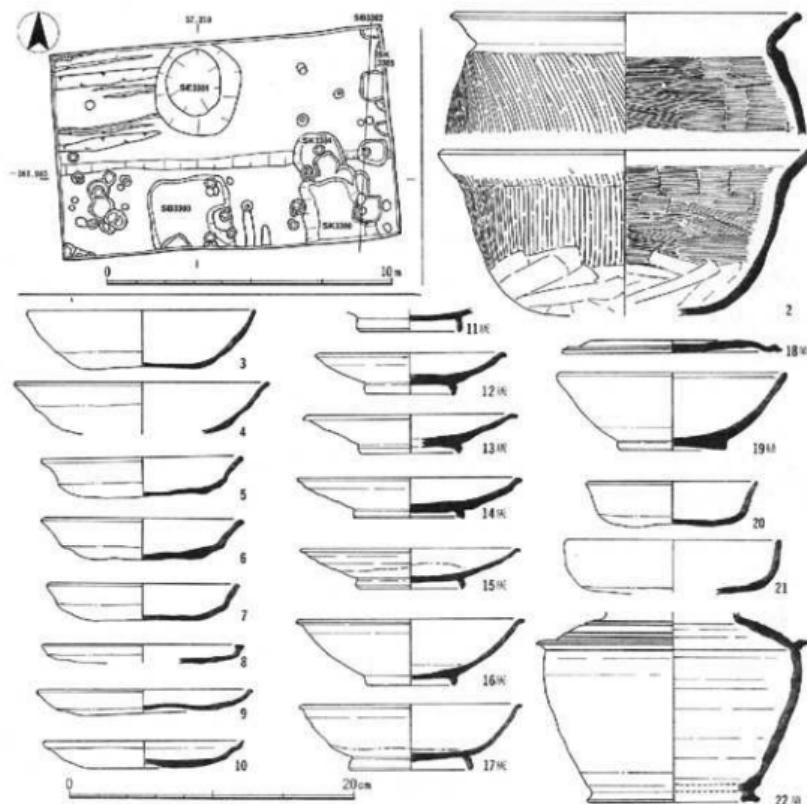
調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和58年8月18日~8月31日

調査面積 83m<sup>2</sup>

## 1) はじめに

「水司鴨口」のヘラ描き土器が出土した第37-4次の調査地区のすぐ南側で、その関連が注目される個所である。標高9.4mの畠地で、東西11.5m、南北7.2mの調査区を設定した。



第11図 遺構 (1 : 200)・遺物 (1 : 4) 実測図 1~19; S K 3300, 20~22; S B 3303

## 2) 調査概要

調査区の北半分は既に浅く土取りされていたが、遺構には影響が無く、井戸、掘立柱建物、土塙、竪穴住居等を検出した。奈良時代の竪穴住居 S B 3303は東西 2.8m、深さ 25cm 前後で、東壁にカマドをもつ。土師器杯、甕、かまと、須恵器杯、壺など多数の土器が出土している。平安時代の掘立柱建物 S B 3302は調査区の東端で検出した。南北棟建物の西側柱列と考えられる。柱掘形 90cm × 1.0m の方形で、深さ 50cm 前後と大型である。柱間は 2.1m、棟方向は N 4° E を示す。土塙 S K 3300、S K 3304、S K 3305はともに黒窯 90号窯期の灰釉陶器を出土する土塙であり、比較的多数の土器がある。特に S K 3300からは畿内産と思われる綠釉陶器をはじめ、灰釉陶器皿、甕、土師器甕、杯、須恵器杯、蓋など 1000 点以上の土器片が出土している。鎌倉

時代の井戸 S E3301は径3.3m×2.9mの素掘り井戸で、埋土には多量の礫を含み、山茶椀、土師器鍋が出土している。

### 3) まとめ

宮城北辺部としては大型の部類に属する10世紀前後の掘立柱建物のほか、黒竪90号窯期段階の一括資料を出す良好な土塙が検出され、37-4次調査と同様、当地区一帯に平安時代中葉以降の建物が多く分布していたことがわかる。一方、奈良時代の竪穴住居は、当地区近辺では、2例目であり、その分布状況は、古里・塚山地区では、密集しているのに対し、当地区では点在するらしい。

## 8. 第48-7次(6ADT-H)調査

調査場所	明和町斎宮宇木葉山307
原 因	車庫の新設
調査主体	明和町斎宮跡保存対策室
調査担当	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和58年9月5日～9月17日
調査面積	120m <sup>2</sup>

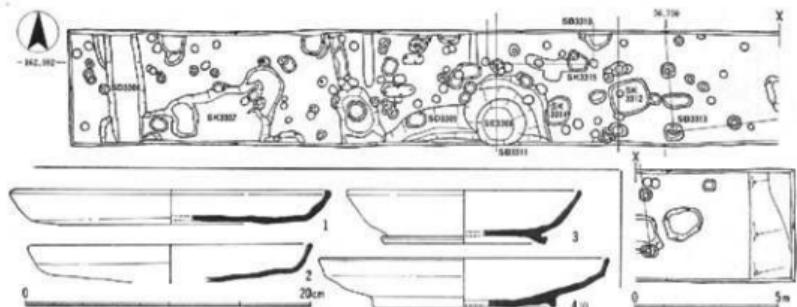
### 1)はじめに

斎宮駅の真南 200mの個所、牛葉部落の南である。昨年度実施した第43-2次調査区のすぐ南側である。幅約2.8mの南北方向の溝S D2900が検出されており、今回のトレンチ調査でも西端部で確認されることが予想された。

### 2) 調査概要

奈良時代の土塙 S K3307、平安時代の掘立柱建物 S B3310、S B3311、S B3313、土塙 S K3312、S K3314、S K3315、溝 S D3306、鎌倉時代の井戸 S E3308、土塙 S K3309などを検出している。

S K3307は発掘区の西端で、一辺6mの方形を呈し、あるいは竪穴住居かもしれない。8世紀後半頃の土師器杯、甕、鍋、須恵器杯、蓋が出土している。S B3311は梁行2間の南北棟の建物と思われるもので、柱掘形は40cm～60cm、柱間は梁行、桁行ともに2.1mで、柱通りはほぼ方位にのる。S B3310、S B3313はともに梁行2間の南北棟で、柱間はそれぞれ2.1m、1.8mである。S B3313は前半に、S B3311は後半に、S B3310は末葉に属する。調査区西端で南北に走る S D3306は幅1.3m、深さ50cmの断面逆台形を呈する。土師器杯、甕、蓋など黒竪14号



第12図 遺構 (1:200)・遺物 (1:4) 実測図 1~4; SK3307

廟期の土器が出土している。SD3306は第43-2次調査で検出した平安時代後半の南北溝SD2900と並行する。SD3306は道路の東側溝であり、西側溝はSD2900に切られたものとも考えられる。平安時代土塁はいずれも径80cm~1.3m程度の小土塁で、SK3312は中葉に、SK3314、SK3315は末葉に属する。鎌倉時代の井戸SE3308は径2.7mの素掘り井戸で、山茶碗、羽釜、白磁片などが出土している。

### 3) まとめ

牛葉集落南部で実施した今回の調査では、奈良時代から鎌倉時代に至る各時期の遺構、遺物を検出し、宮城中央部とよく似た状況を示すことが確認できた。以前から宮城南部にも重要な遺構が存在することが指摘されていたが、今回の調査でますますこのことを裏付けされた。

## 9. 第48-8次(6ACL-E・F・G)調査

調査場所 明和町竹川字東裏334-15・16・17、336-1

原 因 倉庫の新築、盛土

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

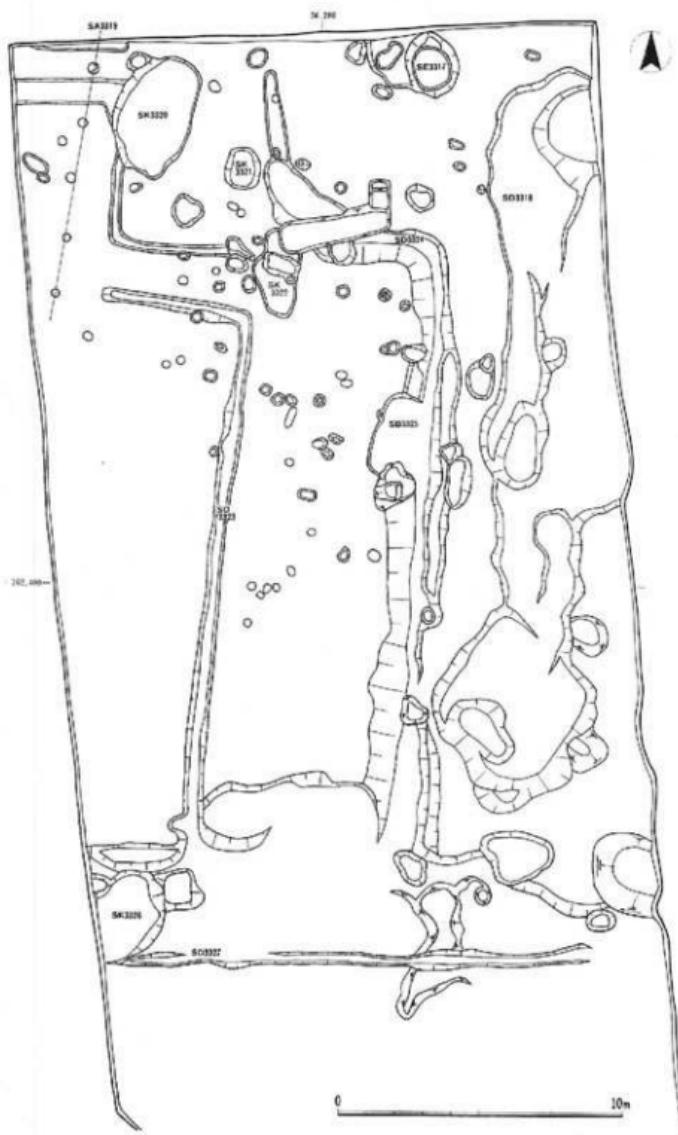
講査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和58年10月11~11月7日

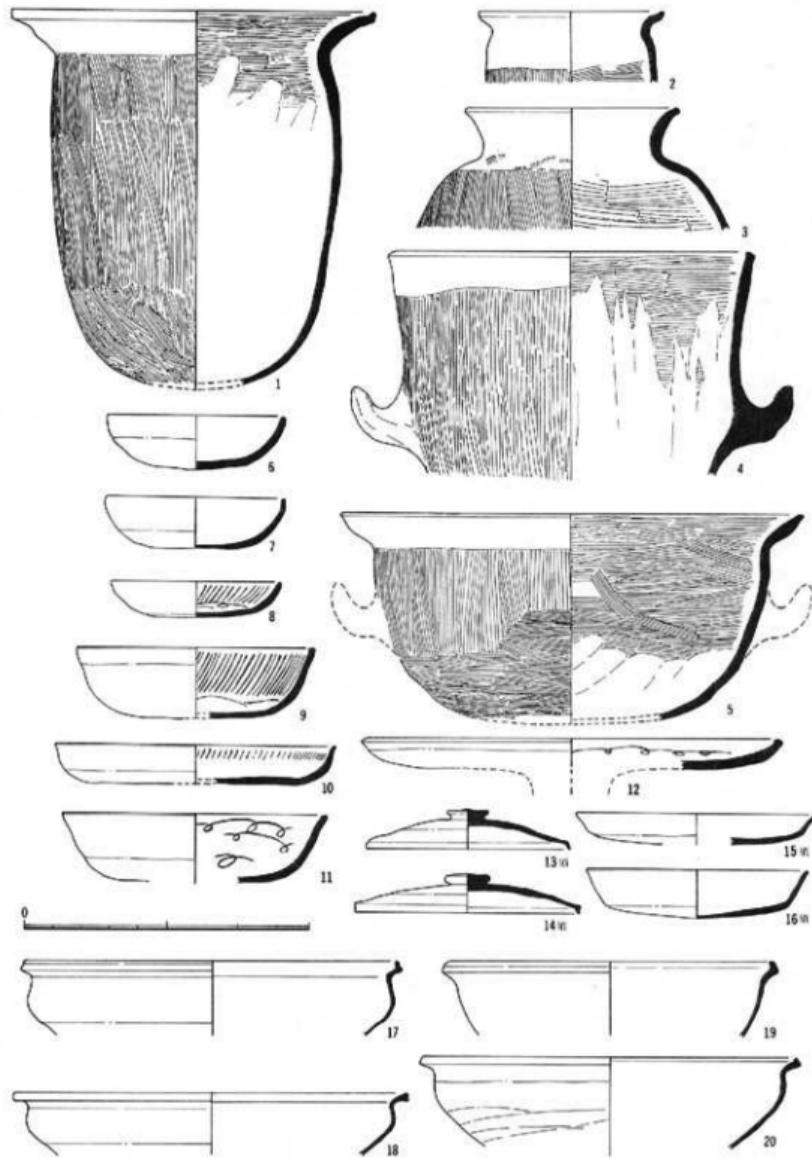
調査面積 840m<sup>2</sup>

### 1) はじめに

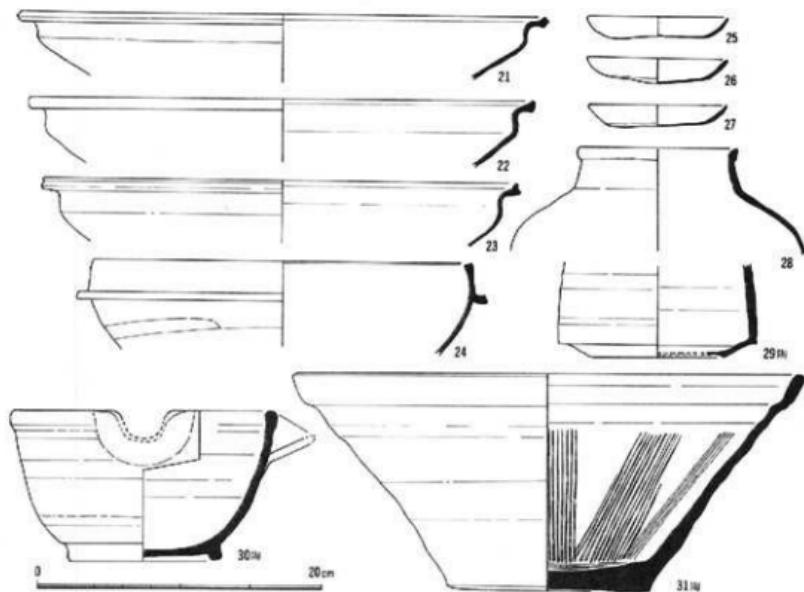
斎宮小学校のすぐ西の雑木林で、3件の現状変更があった。いずれも倉庫建設、盛土工事等に伴うもので、この三件は隣接する個所であるため、同時に調査を実施することになった。第



第13図 造構実測図 (1 : 200)



第14図 遺物実測図 (1 : 4) 1~16 ; SK 3320, 17~20 ; SE 3317



第15図 遺物実測図 (1 : 4) 21~31; S E 3317

48-1次の小学校プールの西100mの個所である。プールの調査同様、奈良時代の竪穴住居や平安時代後半の掘立柱建物の検出が予想された。標高12.5mの林で、立木を伐開後調査を開始した。

## 2) 調査概要

調査区の北半部には比較的多数の遺構、遺物が検出できたが、南半部は表土が浅く、地山上面は木の根によってかなり擾乱されており、遺構は殆んど確認されなかった。

検出した遺構は奈良時代後半の土塙S K3320をはじめ、鎌倉時代の土塙S K3321、S K3322、柵列S A3319、室町時代以降の井戸S E3317、土塙S K3326、溝S D3318、S D3323、S D3324、S D3327などがある。

S K3320は径4.2m×2.7m、深さ30cmの楕円形を呈する土塙で、土師器杯、蓋、甕、鍋、瓶、須恵器杯、蓋など多数の土器が500片近く出土している。S K3321、S K3322はいずれも鎌倉時代の山茶楕、土師器鍋の破片を出土している。S K3322は中央に一段深い土塙があり、二個の土塙が重複したものかもしれない。柵列S A3319は5本の柱穴が一列に並び、柱間は2m、方向は北に対し東へ偏る。江戸時代の井戸S E3317は径2mの素掘り井戸で、1.5m掘り下げている。多数の土器が出土している。播鉢、染付楕、土瓶、香炉などの陶器とともに羽釜、灯明皿、

鍋などがある。この井戸S E 3317と同時期と思われる溝3条は、ほぼ並行して走る。S D 3318、S D 3324はこの井戸を迂回するように曲がる。S D 3325を切り込んでいるが、S D 3325は時期は不明である。S D 3323は幅60cmと幅せまく、長さ19mで西方へ直角に曲がる。このS D 3325のすぐ南の土塙S K 3326は井戸S E 3317と同様の陶器類が出土している。

### 3) まとめ

かつて四脚門が見つかった第15次の調査地の西側にあたる場所であったが、明瞭な斎宮に関連する遺構は少なく、中・近世の遺構が中心となる場所であることが確認された。このことは、今回の調査地点の西、竹川の墓地の北で調査した昭和52年の第16-1次調査において、奈良時代の溝と、中・近世の溝、土塙を確認した例とよく似ている。

## 10. 第48-9次(6 AEV-J)調査

調査場所 明和町斎宮字鈴池341-11

原 因 防火水槽建設

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和58年11月2日~11月18日

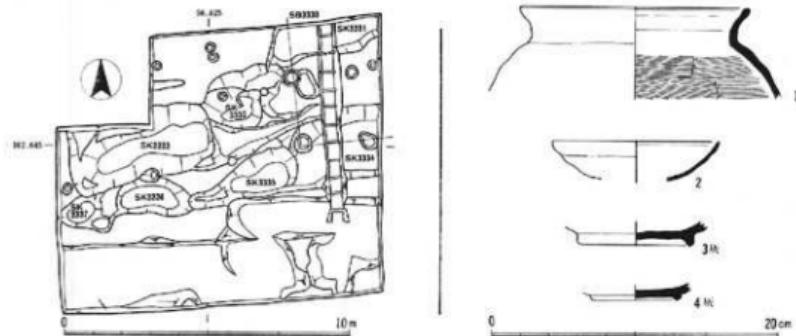
調査面積 102m<sup>2</sup>

### 1)はじめに

史跡の南の境界近くで、牛葉部落の南の辺である。昭和54年、県営圃場整備事業に伴う事前調査を排水路部分について調査を実施している。その個所は今回の調査地点のすぐ北東側10m程の個所である。その際には中世以降の遺物を出土する東西に走る溝S D 1504、S D 1507を検出している。今回の調査地点は標高11.7mの畑地であるが、圃場整備前は南部部分が水田となっていた所である。

### 2) 調査概要

調査区の東寄りの部分には南北に走る排水用土管が埋設されており、部分的に破壊されていた。また、南部分三分の一は約40cm程掘り下げられた状況で、以前水田になっていた個所であることが判明した。しかし、北部分は全面に亘って土塙が溝状に連続する状態で検出されている。いずれも不整形な梢円形を呈している。中でもS K 3333は幅2.4m、長さ5.0mの長梢円形で、深さ75cm、平安時代後半の土師器杯、甕、灰釉陶器皿など、折戸53号窯跡の土器が出土しており、中には破片であるが、朱墨を塗った灰釉陶器皿もある。硯は東側の土塙S K 3331から



第16図 遺構（1：200）・遺物（1：4）実測図 1；SK3336, 3・4；SK3333

も灰釉陶器の椀を転用したものが出土している。他の土壙から出土する遺物も平安時代後半のものが主体を占め、黒鉢90号窯跡から山茶椀が出現する直前のものまである。

土壙SK3331、SK3334に重複して掘立柱建物SB3330が見つかっている。梁行2間の東西棟建物と思われるもので、柱間は桁行とともに2.4mで、柱掘形は径60cm、深さ50cmで、平安時代後半の土師器杯、甌の破片が出土している。

### 3)まとめ

検出した遺構は平安時代後半から末葉にかけての小規模な遺構を検出したのみで、遺物も少量であるが、縁釉陶器2点、灰釉陶器椀の転用甌2点があり、調査区の北側部分には、官衙部分が広がっているものと思われる。

また、調査区は鉤の手になっているのは、当初、防火水槽は北東部分に建設の予定であったが、掘立柱建物や土壙群が検出されたため、さらに南西側に拡張して調査をした結果である。しかし、水田部分も土壙群も西へのびていたため、やむを得ず、防火水槽は掘立柱建物を避け、大部分を旧水田部分に移すことに変更した。

## 11. 第48-10次(6ADT)調査

調査場所	明和町彦宮字牛葉
原 因	町道側溝新設
調査主体	明和町彦宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和58年11月29日

調査面積 25m<sup>2</sup>

#### 1)はじめに

牛葉集落の中、斎宮駅の南 170mの個所で、南にのびる幅3mの町道沿いである。昭和57年に第43-2次、今年度、第48-4次の現状変更に伴う調査を実施している。

#### 2)調査概要

幅1m、延長25mに亘って、重機により地表下70cmまで掘削したあと、7ヶ所で坪掘りを行なったが、いずれの個所でも近代の瓦、陶器、鉄屑などを含む擾乱された土層が地表より120cm程もつづいていた。遺構らしきものも何ら検出できず、付近のこれまでの調査では遺構面が深さ30cm前後であることから、既に遺構は全面に破壊されてしまっていることが判明した。

## 12. 第48-11次(6AGP-E)調査

調査場所 明和町斎宮字鍛冶山2351-1、2352-1

原 因 農業用倉庫の新設

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和58年12月15日～12月21日

調査面積 93m<sup>2</sup>

#### 1)はじめに

調査地は史跡の東限部分、中町より役場へ通じる道路の近鉄線をこえたすぐ東側の畑地である。道路より東側にのびる畑は幅5m～10mで南北に長く、その東は70cm低い水田となり、約50m東でエンマ川となる個所である。これまで昭和51年、第14-5次調査で掘立柱建物を検出している。東西3.1m、南北30mの調査区を設定した。

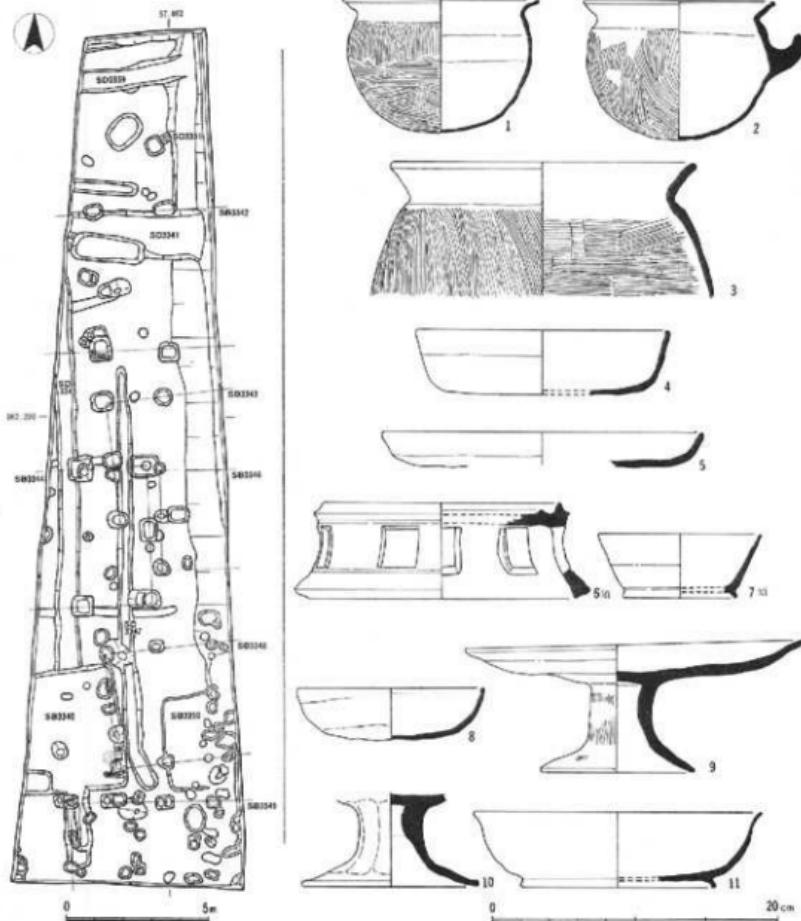
#### 2)調査概要

第14-5次で見つかっている掘立柱建物S B3342を再確認している。この他に、掘立柱建物は中央部分でS B3343、S B3344、S B3346、S B3348、S B3349があり、堅穴住居2戸、溝などを検出している。

堅穴住居は径4.5mと3mの大小2戸があり、S B3340は東壁にカマドを持つ。奈良時代前半の土器が多数出土。須恵器円面鏡もある。S B3350は東側が削平されている。S B3340と同時

期の土師器甕、杯、高杯、須恵器甕、蓋が出土。

掘立柱建物6棟は全て東西棟と考えられるものばかりである。建物方向により2棟づつ三群に分かれる。S B3342、S B3344はE3°Nで、梁行4.8m、柱間桁行とも2.4mを測り、柱掘形も径80cm以上の方形で比較的大形の建物である。S B3343、S B3348は前者より大きく北へ偏りE7°Nである。S B3343は柱間は梁行、桁行ともに2.1m。S B3348の柱間は梁行2.0m、



等17図 造構 (1:200)・遺物 (1:4) 実測図

1~7; S B3340, 8~9; S B3350, 10~11; S B3344

桁行1.8mで、S B3343の南側柱とは4.5m離れる。次いで、S B3346とS B3349はE1.5°Nでほぼ方位にのる。柱掘形は径50cm足らずの円形で、先の建物に比べ一通り小さい。以上の掘立柱建物は奈良時代前半より中葉にかけてのものであろう。

南北に並行に走る溝S D3345、S D3347は平安時代末より鎌倉時代にかけてのもので、東西に走る溝S D3339、S D3341は室町時代のものである。

### 3) まとめ

斎宮跡はこれまで西部地区においては奈良時代の遺構、遺物が多数検出され、東部地区は平安時代に属すると考えていた。しかし、今回の調査において奈良時代の掘立柱建物、竪穴住居が検出され、宮城の東部においても奈良時代の遺構があることが判明した。特に円面硯の出土や、掘立柱建物の建物方向が北に対し数度西へ偏る建物であり、東部地区の平安時代前半の建物や区画溝の方向E4°Nに近い数値であり、当地区も官衙地区である可能性が強く、従来の考え方を再検討しなければならない必要性がでてきた。

## 13. 第48-12次(6 AFC-H)調査

調査場所 明和町斎宮字西前沖2604-8・9

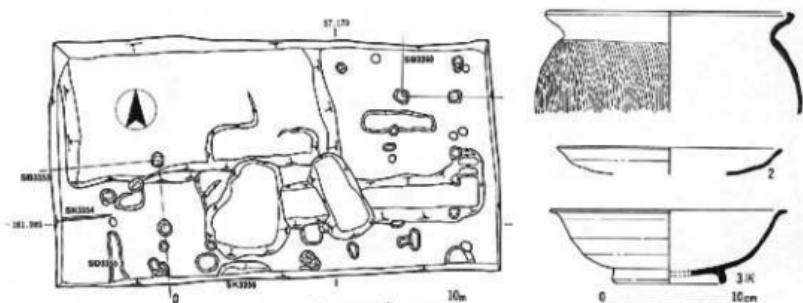
原 因 個人住宅建設

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和59年2月15日～2月23日

調査面積 128m<sup>2</sup>



第18図 遺構 (1:200)・遺物実測図 1～3 ; S B3360

### 1)はじめに

調査地点は調査事務所の北東 200mの個所、町道東野・相野線の西側部分である。これまでに当地区付近では「水司鶴口」へラ描土器を出土した第47-4次調査をはじめ、第48-5・6次などの住宅建設や町道開溝新設に伴う事前調査を実施しており、平安時代中葉より末葉の遺構を多く検出している。

### 2)調査概要

調査区の約半分が後世の擾乱のため、遺構は既に破壊されていたが、奈良時代の掘立柱建物1棟、土塙1、平安時代の掘立柱建物1棟、土塙、溝、鎌倉時代の土塙などを検出している。掘立柱建物は、いずれも部分的に検出したのみで規模は不明である。出土遺物は奈良時代より平安時代にいたる土器片が少量出土したにすぎない。

### 3)まとめ

当地区は旧斎明中学校が建っていた所であり、今回の調査で確認した擾乱は、その際のものと思われるが、部分的に遺構が残っていることが明らかになり、宮城北西部における遺構状況は奈良時代と平安時代中葉以降のものが主体を占めるというこれまでの見解を再確認できた。

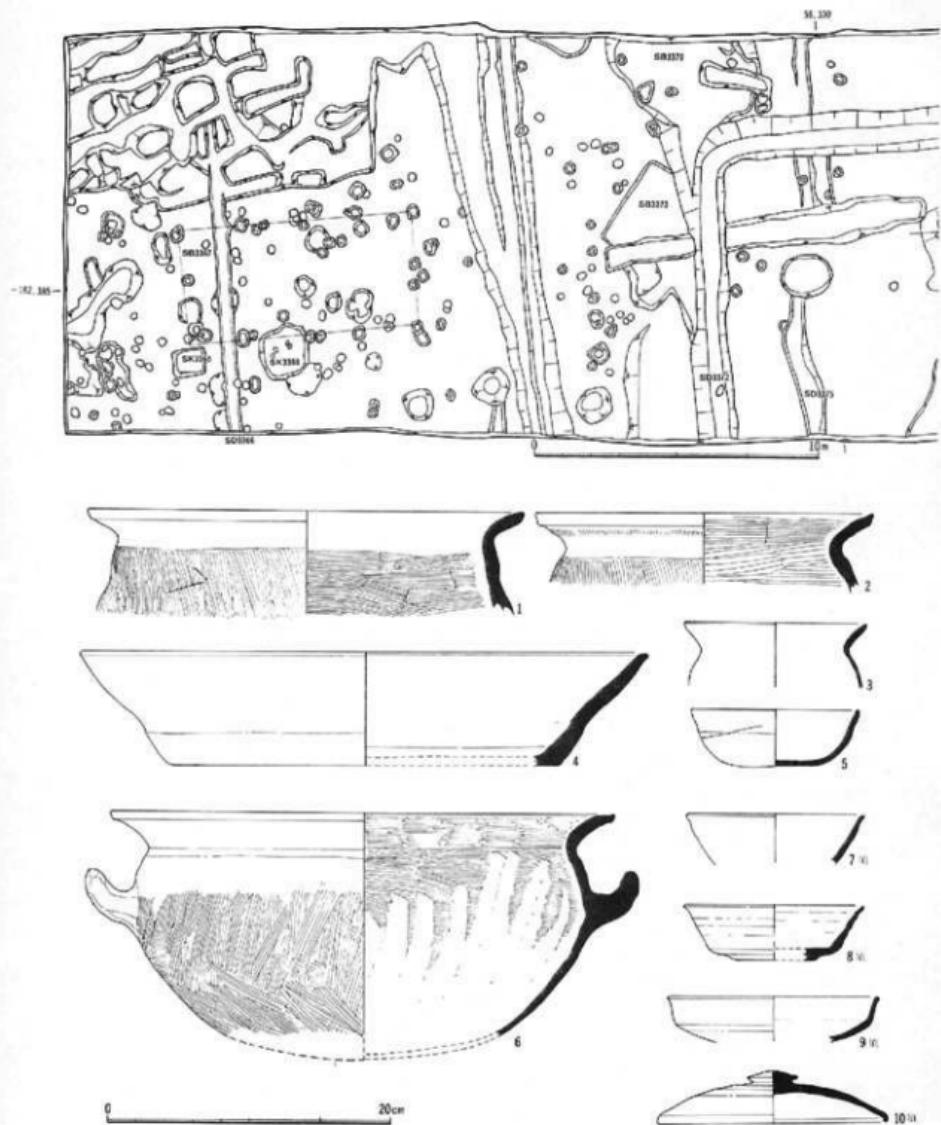
## 14. 第48-13次(6 ACM-O)調査

調査場所	明和町竹川字東裏283-2
原 因	斎宮小学校校舎増築
調査主体	明和町教育委員会
調査協力	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和59年2月20日～3月31日
調査面積	840m <sup>2</sup>

### 1)はじめに

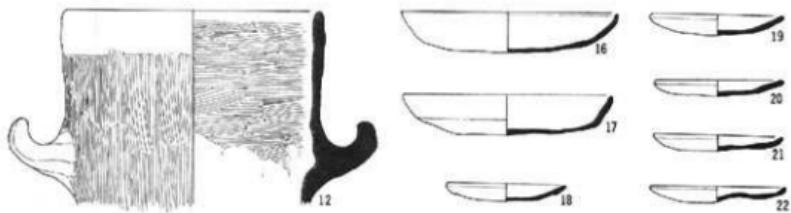
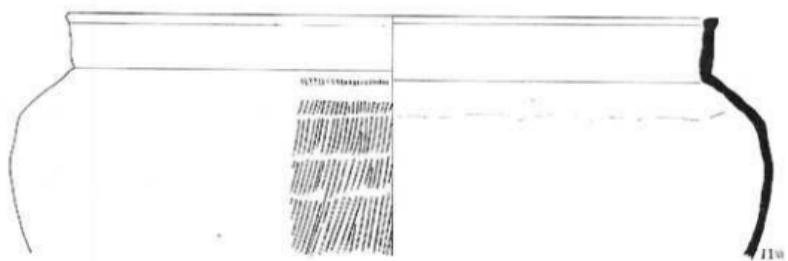
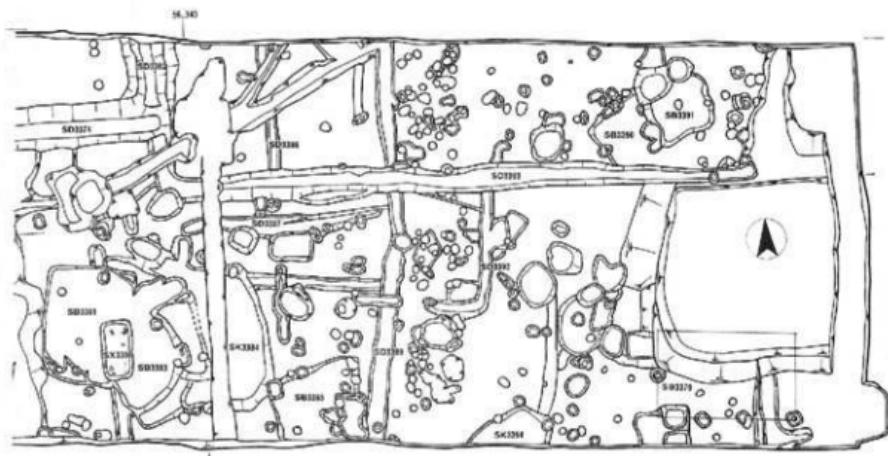
斎宮小学校が西側に増設されることになったため、その事前の発掘調査である。昭和52年の現斎宮小学校建設に伴う事前の発掘調査では、染地塙、四脚門、竪穴住居、方形周溝など多数の遺構が検出され、そのうち、四脚門の一部は校舎床下に現状保存されている。

その後、小学校裏にプール建設が計画され、約1,000m<sup>2</sup>にわたり調査(第48-1次)を実施し、また、西側の個人住宅建設に伴う調査(第48-8次)も約840m<sup>2</sup>実施し、奈良時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物、土塙、室町時代以降の井戸、溝などが見つかっている。



第19図 遺構 (1:200)・遺物実測図 (1:4)

1~5; SB3381, 6~12; SB3385, 13~15; SK3368, 16~22; SX3380



## 2) 調査概要

今回の調査個所は、以前プールが在った個所で、一部基礎や排水溝の部分は既に破壊されていたが、奈良時代の竪穴住居7、土塙7、平安時代より鎌倉時代にかけての溝2、鎌倉時代の土塙墓1、溝1、室町時代以降の溝2などが見つかっている。竪穴住居は、一辺4m足らずの方形で、S B3381、S B3383は重複している。竪穴住居は、土塙とともに奈良時代後半に属するものと考えられる。土塙S K3368は一辺1.5mの方形で、平安時代中葉の黒窓90号窯期土器が出土している。S B3367は唯一の掘立柱建物で、4間×2間の東西棟で、柱間は桁行、梁行ともに約2mである。また、S B3381に重複するS X3380は平安時代末頃の土塙墓で、埋納された土師器皿や、棺に使用した釘などが出土している。

## 3) まとめ

調査の結果、当地区では奈良時代と平安時代中葉以降の遺構、遺物が検出されている。奈良時代では竪穴住居がほとんどであり掘立柱建物は少ない。その上観の出土も見られず、官衙地区とは考え難く、古里地区を中心とする官衙の周縁部かもしれない。しかし、古里地区のように奈良時代前半にまで遡るものはないようである。平安時代前半の遺構、遺物は全く見られず中葉以降になると再び確認されるようになる。掘立柱建物をみると御館・柳原地区のような大規模なものではないが、四脚門、築地塀等の存在から当地区も官衙の一部、もしくは官人の居住地と考えられる。

# 15. 第48-14次(6 AET)調査

調査場所 明和町斎宮字牛葉

原因 町道創設新設

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和59年3月1日～3月5日

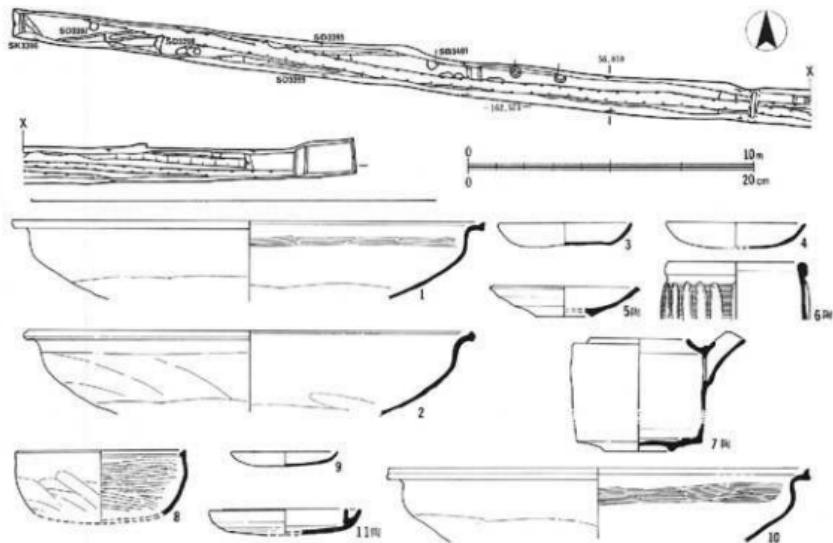
調査面積 40m<sup>2</sup>

## 1) はじめに

牛葉部落の裏手の幅2m足らずの小さな町道部分で、小字牛葉と鉢池の境界部分である。あらかじめ重機により幅1m、長さ40mにわたり地山面近くまで耕土したのち調査を実施した。

## 2) 調査概要

調査区の中央を水道管や有線電話の回線の埋設溝が東西に走っていたが、室町時代以降、江



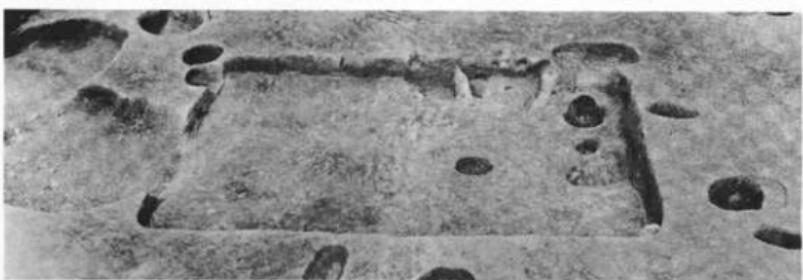
第20図 遺構 (1:200)・遺物 (1:4) 実測図 1~7; SK 3396, 8~10; SD 3395

戸時代頃の土塀SK 3396、溝SD 3395、SD 3397、SD 3398、SD 3399、時期不明の掘立柱建物SB 3401を検出した。遺物は室町時代以降の鍋、灯明皿、陶器、磁器片が多数出土している。

### 3)まとめ

僅か幅1m足らずの調査であったが、掘立柱建物をはじめ近世の遺構、遺物が確認できた。參宮街道沿いの集落の下には、これまでの付近の調査においては平安時代の多くの遺構、遺物が出土している。しかし、道路や既に住居が建っている個所は古くより人々の手が加わり、斎宮時代の遺構は部分的に破壊されている個所があるようで、近世の室町時代や江戸時代の遺構、遺物が多く見られるようになる。

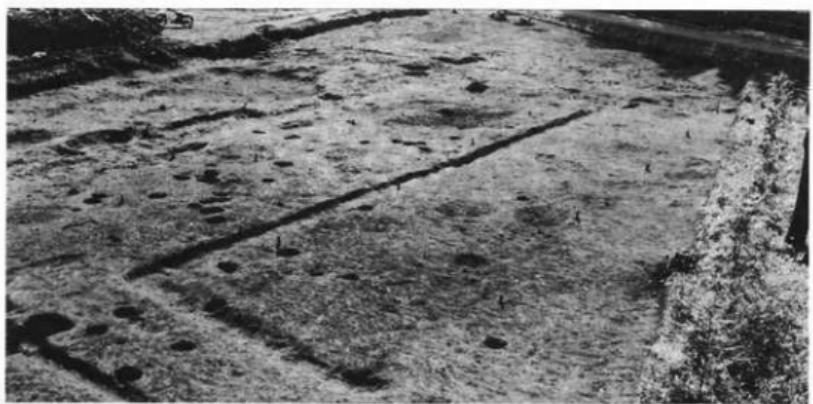




上・中；第48—1次全景・下；第48—1次 SB2947



上左；第48-2次全景。上右；第48-4次全景。中左；第48-3次全景。中右；第48-14次全景  
下；第48-5次全景



上 ; 第48- 6 次全景・中左 ; 第48- 7 次全景・中右 ; 第48- 8 次北半部  
下 ; 第48- 8 次南半部



上；第48-9次全景。中左；第48-10次。中右；第48-11次全景

下；第48-11次 S B 3340, S B 3350



上；第48-12次全景。中；第48-13次全景。下；第48-13次 S B 3381, S K 3380

---

---

史 跡 斎 宮 跡  
昭和58年度現状変更緊急発掘調査報告

昭和 59 年 3 月 31 日

編集・発行 明 和 町  
三重県斎宮跡調査事務所  
印 刷 光出版印刷株式会社

---

---

